様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月　１８日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520567
研究課題名（和文）江戸時代における参詣街道沿いの地域社会の構造

研究課題名（英文）The Structure of Local Society along Pilgrimage Routes during the Edo Period

研究代表者
塚本　明　　（TSUKAMOTO AKIRA　）
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：40217279

研究成果の概要（和文）：
江戸時代に寺社参詣道沿いの村々が、旅人たちといかなる関係を持ち、それは地域社会の成り立ちにどのような影響を与えたのかを検討した。基礎作業として、熊野街道を対象に、諸国の旅人が著した道中日記 260 点、善根宿に納められた旅人の納札 5000 点余、地域社会に遺された算用帳中の旅人救済記録約 7000 点をデータ化した。その上で道中日記の世界と対比しつつ、地域社会の救済を受けながら旅を続ける貧しき旅人の世界を抽出した。

研究成果の概要（英文）：
I investigated what sort of relationship villages along the pilgrimage routes to temples and shrines during the Edo Period had with travelers, and what kind of impact that had on the organization of local society.　As groundwork, focusing on the Kumano route I digitized 260 examples of travel diaries recorded by travelers from various provinces (*kuni*), more than 5,000 examples of votive tablets (*nōsatsu*) offered by travelers to free lodgings for pilgrims (*zenkon'yado*), and some 7,000 records of aid to travelers indicated in account ledgers found in local communities.　Based on this, I distilled the world of impoverished travelers who received assistance from local communities as they continued their journey, and contrasted that with the world of their travel diaries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：史学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：道中日記　熊野街道　巡礼　旅　尾鷲組大庄屋文書　神仏　善根宿　納札

１．研究開始当初の背景

江戸時代の民衆が信仰を掲げて行った旅については、従来、彼らが著した旅日記＝「道中日記」を分析素材として、田中智彦、小野寺淳、岩鼻通明ら歴史地理学の立場から旅のルートや参詣の特質を論じた研究が積み重ねられてきた。

また、特に関東・東北地方の多くの自治体史や郷土史などで、遠隔地へ参詣の旅に出た民衆の様子を紹介する記述が見られ、博物館の展示テーマとしてもしばしば取り上げられている。交通史や江戸の風俗史のなかで、街道や宿場の様子が道中日記を用いて説明されることもある。

だが、それらは道中日記の記載のみに注目したために、それが描く道沿いの世界がどの程度正確なものかを検討し、それを地域史研究に応用しようという観点はなかった。旅の記録という直接的な性格にまず焦点が当てられたこともあるが、一番の原因は、道中日記の所在が全国に散在しているため、多数の道中日記を集めての書誌学的な分析が不十分だった点にある。また道中日記を表す農民は村落では上層に位置しており、貧しき民衆の旅や、彼らを含めた旅人を迎える地域社会の構造には踏み込めていない。

さて、伊勢と熊野は歴史的に日本の精神文化の中核となる地であり、国内外で数多くの研究が蓄積されてきた。だがそれらの多くは伊勢神宮、熊野大社の史料を用いた分析であるため、神社自体やそれへの信仰の分析に限定され、伊勢や熊野を「地域」としてとらえる視点に欠けている。

２．研究の目的

江戸時代に主として伊勢や熊野を参詣に訪れた庶民の手になる「道中日記」と、道沿いの地域史料とを併せ用いることで、街道沿いの地域の新たな歴史像構築を試みる。道中日記の史料としての特質を位置付け、伊勢・熊野周辺地域に残る在地史料と突き合わせることが、基礎的な作業となる。

本研究は、道中日記の活用としては、その執筆者＝旅人に焦点を当てる従来の研究とは異なり、旅人を迎える地域の側に焦点を当てるものである。

地域の史料と道中日記、すなわち地域内部に残された史料と、地域を外から見た史料とを合わせ、実証的に分析することで、参宮街道・熊野街道に沿った伊勢・熊野の地域の実態に迫るものである。

これにより道中日記というテキストに新たな光を当て、新たな地域像の構築を目指す。

そもそも参詣街道は、原初的には巡礼のための道ではなく、生活の道として造られたものであった。それが信仰の道ともなり、また政治や経済の道ともなっていくのである。信仰の道としての比重が高まり、地域経済において巡礼の通行が一定の意味を持ってくると、地域社会が旅人を受け入れる姿勢や領主の対応も転換する。巡礼たちが支出する費用は、道中日記の分析としてしばしばなされているが、彼らの負担は、地域社会側から見ればその経済を潤すものでもあった。そのため当初は旅人の訪れを歓迎し保護する姿勢を取る。だが、江戸後期になると経済的に貧しい巡礼の増加に伴い、治安維持の観点から統制・抑制する要素も出てくると予想される。

これらの歴史段階をおさえることで、参詣街道沿いの地域の特質、また江戸社会における参詣街道の持つ意味について明らかにす

ることを目指す。同時に、伊勢神宮、熊野大社を地域社会、地域文化のなかに改めて位置付け直すことも可能になると考える。

３．研究の方法

伊勢や熊野周辺に豊富に残る地域史料に加えて、この地域を外からの視点で描いた道中日記類を合わせ検討することで、街道沿いの地域社会の特質や、当時の旅の実相に迫る。

まず、全国に散在する道中日記をできるだけ収集し、それらの書誌的な分析を深める。描かれた地域側の史料と照合することで、道中日記の信憑性や視点の特徴を明らかにし、道中日記が地域史研究にどのように利用できるかを検討する。

地域史料については、伊勢から熊野に至る街道沿いの文書を中心に、まずその所在情報を整理し、同時に参詣街道と関係する文書をデータ化する。

尾鷲市に架蔵される尾鷲組大庄屋文書については、４年ほど前から整理作業に着手しているが、まだ未整理の分が 5000 点ほど残されており、これを主な調査・検討の対象する。これ以外にも当該地域には尾鷲市の浜藤家、土井家、紀伊長島町の長井家などのまとまった文書が知られている。これらの所在調査には、三重県総務部学事文書課『三重県史資料調査報告書』（１～12、1985～97 年）を手掛かりにし、三重県史編さん室の協力を得る。

以上の作業の上で、参詣街道が存在するがゆえの個性的な地域特質を明らかにする。

４．研究成果

道中日記及び関連史料の補充調査を行い、全国の公共機関が所蔵する熊野街道経由の道中日記２６０点を複写収集した。この数字は、個人所有の文書を除き、ほぼ網羅に近いレベルまで達したと考える。

伊勢参宮街道の世界を中心に、道中日記に加え、書肆が刊行した道中案内記、京都・大坂の旅籠屋が作成し、宣伝用に無料で配布した道中案内記、旅籠屋のネットワークに基づく定宿帳、講帳などの道中関連史料をも合わせ検討し、道中日記の成立要因と記載上の特質を整理した。道中日記は講の仲間への報告や次に出立する者への情報提供という目的で作成されるため、多くは道中案内記の記載を転載していることが少なくない。またそれゆえに形式は整いつつも単調である。だが、多くの道中日記を集積して、細部の違いに注目することにより、道中日記の著者の個性のみならず、当時の地域を解明する史料情報としての利用が可能になる。そのための方法論を提示した。

熊野街道を経由した道中日記２６０点については、年次、出典（所蔵機関）、出身地、執筆者の名前、年齢、性別、村内の位置（階層）、同行者・人数などの詳細情報を含めたデータベースを報告書に掲載した。熊野街道を経由しない大和越えの道中日記は、未見のものが多く整理が行き届かなかったため、データベース化は今後の課題としたい。

伊勢参宮を目的としつつも旅人は寺院にも詣でており、観音信仰に基づき西国巡礼を志す道中日記でも神社参詣の記事は多い。伊勢神宮は、教義の上では最も厳密に仏教を排除したが、訪れる旅人たちは神宮に至るまでも、伊勢滞在中も、寺院をも合わせて参詣して廻った。また本来寺院を対象とする納経帳に伊勢神宮が登場するなど、神社と寺院を混同する傾向さえ見られる。だが、明治維新以後は新政府により急速に神と仏の分離が強圧的に進められる。こうした歴史過程について検討を加え、論文にまとめた。

道中日記は裕福な旅人の記録であるが、貧しき巡礼の旅の実態を把握するため、尾鷲組

大庄屋文書（尾鷲市中央公民館郷土室蔵）に見られる救済記録と、熊野市大泊町で発見された若山家文書・善根宿納札の調査を行った。

まず救済記録は、18 世紀半ばから幕末に至るまでの約 7000 件の事例について統計的に検討した。旅人の属性（宗教者、障害者、芸能民ら）や地域分布のほか、旅の目的（信仰の様相）、救済金額や病気療養、村送り制度などの救済の実態等について分析した（報告書に論考掲載）。故郷に帰ることなく巡礼地を廻り続ける旅人の姿を抽出できたことが大きな成果であると考えている。

善根宿の納札については、地元団体らと協力して整理を終え、調査報告書を刊行した。道中日記や救済記録に比し著しい特徴として、西国巡礼以外に四国巡礼、六十六部、神社参詣など極めて多種多様な信仰を持つ旅人の姿が見えたこと、女性の比重が高いこと、札所寺院の納札調査で明らかにされた地域分布とは大きく異なること、などが挙げられる。

以上のように、道中日記、救済記録、善根宿納札と３種の史料を用いることにより、これまでに比し複合的に江戸時代の旅の姿を把握することが可能になった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

（1）塚本明　近世伊勢神宮領における神仏関係について　人文論叢、三重大学人文学部文化学科、査読無、27、2010、15-34

（2）塚本明　近世宇治・山田の神と仏　皇學館大学神道研究所紀要　査読無 26 輯、2010、37-44

（3）塚本明　巡り続ける江戸時代の旅人たち　国際熊野学会誌　査読有、１号、2010、17-27

（4）塚本明　道中記研究の可能性　三重大史学三重大学人文学部日本史・考古学研究室、査読無、８、2009　31-51

（5）塚本明　熊野街道「伊勢路」の特質－江戸時代の道中記から－　『熊野古道と世界遺産を考える』（第９回全国歴史の道会議三重県大会報告書）　査読無、2008、6-21

〔学会発表〕（計３件）

（1）塚本明　近世宇治・山田の神と仏　（皇學館大学神道研究所公開学術シンポジウム、2008 年 11 月 29 日）

（2）塚本明　道中記から見た交通史研究（交通史研究会、2008 年９月 27 日）

（3）塚本明　江戸時代の巡礼たちと伊勢路―道中記と地域史料から―（国際熊野学会、2007 年 11 月 23 日）

〔図書〕（計３件）

（1）塚本明　江戸時代における参詣街道沿いの地域社会の構造（科研報告書）、2010、206

（2）塚本明研究室・熊野古文書同好会　三重県熊野市大泊町若山家所蔵 熊野街道善根宿納札調査報告書　熊野市、2010、188

（3）塚本明研究室　道中記に描かれた三木里～曽根次郎坂太郎坂　2008、293

６．研究組織
(1)研究代表者

塚本　明（TSUKAMOTO　AKIRA　）
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：40217279

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：